

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 15 日現在

機関番号：62501

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320195

研究課題名(和文)国民儀礼化する通過儀礼・年中行事の資料論的研究

研究課題名(英文)Material studies on nation ritualization of the rite of passage and annual event

研究代表者

山田 慎也(Yamada, Shinya)

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・准教授

研究者番号：90311133

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,400,000円

研究成果の概要(和文)：近代化過程において、通過儀礼や年中行事などの民俗が、政治的、医療的、社会的、経済的影響を、それぞれ単独ではなく複合的に受けることで変容が生成していることが、本研究によって明らかになった。その際、このような変容は基本的には国民国家形成の過程で生じ、標準とされる儀礼が形成されていく。さらに標準とされる儀礼と常に対照化することで、地域的な民俗の差異が意識されるようになっていく。その場合、差異がより強化される場合と、逆に解消される場合があるが、それは民俗に対する人びとの評価によってその方向が別れていくことも判明した。

研究成果の概要(英文)：This study showed that the folk rituals like the rite of passage and annual event transform in the process of modernization, and these are not influenced by the single factor, but composed from multiple factors like political, medical, social and economic ones. The transformation of the folk rituals basically occurs in the process of the formation of the nation states, and standardization of the ritual is happened. At the time, by contrasting with the standard ritual, the difference of regional folk is standing out. By estimation for the ritual folk, sometimes the difference is strengthened and other times the difference is weakened.

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード：国民国家 近代化 生活改善運動 商品化 法制 医療 社会変動

1. 研究開始当初の背景

各地域で伝承されてきた諸儀礼や習俗等の民俗は、地域の社会構造や信仰、他界観・宗教観などと密接に結びつき、人々の生活の中に浸透し日常を規律してきた。とくに年中行事は四季というマクロコスモスを規律する儀礼であり、通過儀礼はひとの一生というミクロコスモスを秩序づけるものであり、民俗儀礼として中心的な存在である。これらの儀礼について、民俗学は地域の個性や差異を重視し、調査し資料化を進めてきた。例えば『産育習俗語彙』(柳田国男・橋浦泰雄著、1935)『葬送習俗語彙』(柳田国男著、1937)『婚姻習俗語彙』(柳田国男・大間知篤三著、1937)といった通過儀礼関連や、『歳時習俗語彙』(柳田国男編、1939)などの年中行事関連を始め、以降、各地の市町村史や郷土史など地域の民俗儀礼についての蓄積は膨大である。

だが民俗儀礼は、こうした調査がすすむ一方、近代化の過程で大きく変容しており、現在実践されている儀礼は、さまざまな要因によって地域のコンテキストから切り離され、均質化する傾向が大きい。例えば、七五三は、地域によりさまざまな年齢別、男女別などの組み合わせによって従来行われてきたが、現在、女子の三、七歳、男子の三、五歳とされ、従来慣習のない地域でも行われるようになった。これは商業化による宣伝と作法書の普及で地域共同体とつながりのない核家族が行うことで全国的に普及した。また墓制は、屋敷墓地や両墓制など地域により多様であったが、明治17年の墓地及埋葬取締規則(後のいわゆる墓地埋葬法)の規制により、墓の習俗も次第に平準化しつつある。

こうした民俗儀礼の変容に関して、例えば通過儀礼では、出産の医療化による民俗の変容について板橋春夫(『誕生と死の民俗学』2007)や鈴木由利子(「人工妊娠中絶と水子供養」『東北民俗』41輯、2007)などの分析がある。また葬送に関しては、葬儀産業の発達と葬送儀礼の変容については井上章一『霊柩車の誕生』(1984)山田慎也『現代日本の死と葬儀』(2007)などがあり、墓地行政と法令による墓制の変容について前田俊一郎『墓制の民俗学』(2010)など、個別的には指摘されている。とくに政治的要因による民俗儀礼の変容については、岩本通弥の「可視化される習俗 民力涵養運動期における「国民儀礼」の創出」(『国立歴史民俗博物館研究報告』141集、2008)によって戦前期の政治状況によって民俗が創成、変容する過程について分析し、現在の誕生儀礼に影響を及ぼしていることを指摘しており、また例えば新生活運動と民俗変容との関係(田中宣一「新生活運動と新生活運動協会」『成城文藝』181号、2003)など、それぞれの個別の検討がわずかながら蓄積されているが、それらの諸関係を整理総合化する研究はあまりなされてこなかった。

つまり、民俗儀礼の変容の要因はおもに以下の4点に整理できる。まず法令の施行や行政の働きかけ、風俗改良運動や生活改善運動などの影響などを含む政治的要因、出産や終末期、医師による死亡確認など生物医療の進展による医療的要因、またデパートや葬祭業など、儀礼の商品化による消費文化の進展による経済的要因、核家族化と地域コミュニティの変容、地域の過疎化、少子高齢化などによる社会的要因による変容である。これらの要因は、日本という国民国家形成による動向であり、その作用によって儀礼が均質化している点で「国民儀礼」ということができる。これらの要因は相互に影響を及ぼしあって作用しており、その諸要因を分析し、変容の過程を明らかにしたうえで、相互の関係を総合理論化する必要がある。

従来の民俗学では、地域独自の儀礼をおもに取り上げてきているが、実際には情報や人の移動が流動化している現代において、全国的な平準化とのせめぎ合いの中で生じているものであり、地域性を持つ儀礼を理解する上でも全国的動向の把握は重要である。

さらにこうした均質化した国民儀礼については、従来積極的に資料化がなされてこなかった。多くの民俗博物館が、地域性のある儀礼については積極的に調査を行い文献や映像などの資料収集する一方で、均質化した国民儀礼は地域と結びつかないためであり、とくにモノ資料は体系的にまた積極的に収集されていない。だが、民俗儀礼全体を理解するだけでなく、地域性のある儀礼を理解する上でも、均質化していく現代の動態を把握する必要があり、こうした国民儀礼の資料論の確立が不可欠である。そこで報告書や動画、画像資料にかたよらず、モノ資料をもふくめた総合的な資料論を構築し、儀礼の動態を示す資料収集の方法と方向性の検討が必要である。

2. 研究の目的

1 民俗儀礼の変容の要因について、以下の4つの観点から分析をする。

政治的要因については、地方改良運動や生活改善運動、新生活運動などの目的と実態を分析し、それが儀礼に及ぼした影響だけでなく、当時の儀礼観を明らかにする。

医療的要因については、とくに生命に関わる通過儀礼、誕生と葬送における変容の過程と要因を、医療の進展との関係から検討する。特に妊娠のいつの段階で一個の人格と見なし、生命の終了をいつとするのか、儀礼と生命観の関係を明らかにする。

社会的要因については、近代化による核家族化の進展と地域共同体の解体によって、婚姻のあり方と家族観の変容、葬送儀礼の変容と先祖観、死生観の影響を明らかにし、少子高齢化による葬儀の小規模化や直葬への変化などの現代的動向にも焦点を当てる。

経済的要因について、消費文化の浸透と儀

礼の商品化として年中行事におけるデパートやスーパーマーケット、コンビニエンスストアなどの影響を検討する。さらに葬儀社や結婚式場、儀礼の専門業者の誕生を分析し、大衆消費社会と民俗儀礼の関係を明らかにする。

2 以上の4つの変容の要因について国民国家形成過程における相互の関連、影響を踏まえて理論的統合化をはかる。

3 国民儀礼の資料について、文献や映像資料だけでなくモノ資料も含め、資料の抽出と収集の方向性について検討し、資料論の構築を図る。

3. 研究の方法

まず政治的要因と医療的要因をA班とし、経済的要因と社会的要因をB班とし、それぞれの班が民俗儀礼の変容によって均質化していく要因と過程を分析する。その際には地域性を持つ儀礼にも留意することで、国民儀礼化の特質を明らかにすることができる。

A班(政治的要因・医療的要因と儀礼の変容)

ここでは明治期以降のさまざまな風俗改良運動や生活改善運動、新生活運動など、民俗に対する全国的な変革に関わる政治的規制や運動について、時代を追ってその変遷を取り上げ、対象化された儀礼とともにその実質的な影響を分析する。また生物医療の導入によって、医事法令の規制と医師という専門家への依存から、一般の人々が直接、誕生や死の場面への介入が減少し、次第に儀礼が省略されていく過程を明らかにする。さらに生命の始期と終期についての知識が医療行為を通して形成され、生命観に影響を及ぼしている状況を、儀礼と人々の言説を通して分析をする。さらに民俗儀礼の重要な構成要素である呪術的部分が政治的規制による近代的啓蒙や、医療による科学的身体観によって否定されていく過程を検討し、国民儀礼の浸透によって失われていく民俗的観念を中心に分析を行う。

B班(社会的要因・経済的要因と儀礼の変容)

社会的要因については、「家」から近代的核家族への変化の過程で、どのように婚姻のあり方が変容し、結婚式も変化していったかを分析する。さらに地域共同体の解体は葬送儀礼にも変化を及ぼしているが、その過程と葬祭業による代替的役割を明らかにする。また経済的要因については、消費文化の浸透と儀礼の商品化について、とくに年中行事を中心に分析する。その際にデパートやスーパーマーケット、コンビニエンスストアなどの様々な機関がどのレベルで影響を与えているかを検討する。さらに葬儀社や結婚式場など専門業者の誕生等を分析することで、大衆消費社会の浸透と民俗儀礼の関係を考察する。また社会的、経済的要因によって、民俗儀礼のなかでも祝祭空間が地域から乖離し、専門業

者などによって構築されている点についても分析を行う。

4. 研究成果

23年度

民俗の変容の諸要因のなかで、政治的要因については、生活改善運動や新生活運動に関する資料の収集を行った。とくに三月節供などでは、華美になる風潮に対し、大人中心のものであるとして、こども中心の儀礼への主張を行っており、年中行事の変質をうかがわせる資料でもあった。また医療的要因については、大正期の病院の死亡診断書の控の調査を進めている。明治期の医制をはじめとする医療法令や墓地取締規則細目標準などによる届け出の方式の整備などで、医師による死亡確認によって届出をしないと埋火葬ができないなど、医療と葬送の手続きの一体化が進んでいくプロセスが把握できる。

さらに社会的要因に対しては、結婚の作法書の収集を進めている。近世にもさまざまな作法書があったが、近代になるとさらに刊行される。これは地域の慣習にとられない新中間層の成立や婚姻の広域化による儀礼の標準化とも考えられ、さらなる調査が必要である。また経済的要因に関しては、デパート等の儀礼の介入であり、節供や七五三、結婚式などは消費の場としてデパートも積極的に展開しており、またその際に新たな流行を作り出している。また近年は節供行事を観光化に生かす試みが各地でなされ、徳島県勝浦町のビックひなまつりや山形県酒田市の庄内雑街道の調査を行った。

雑行事に関しては、勝浦町は全国に先駆けで行ったという点で、さらなる調査を行う必要がある。さらに結婚式に関しては、社会的要因だけでなく、上記のような経済的要因もみられるし、さらには純血の発想など、医療的な視点もはいつており、様々な変容の要因に留意していく必要があることが明らかになってきた。

さらに医療化に関しては、「近代化のなかの誕生と死」のフォーラムを開催し、出産の医療化と葬制の商業化、墓制の法制化について検討した。

24年度

A班においては、民俗儀礼の変容をもたらす近代の生活改善運動や戦後の新生活運動などに関する資料の収集分析をはかっていた。例えば生活改善運動については、「生活改善の栞」のなかで、社交に関して結婚や葬儀、贈答が対象化されていったことがわかった。また特に雑祭りが改善の対象として取り上げられていることなどが把握でき、節供行事の商品化との関係が窺え、さらなる分析が必要であることが明らかになった。また死の医療化についての調査も進んでおり、遺体の清拭が浸透していくにつれ、湯灌が無くなっていくが、近年、グリーンケア的な側面が

ら、死後処置が見いだされていることを分析した。その際にエンジェルセットと言われる死後処置の器具が重視されていることが判明した。

B班については、神前結婚式の浸透に関して永島婚礼会という移動式神前結婚式を開発した組織の調査を進めた。ホテルや宴会場等の動向も重要であり、挙式披露宴を連続して行うことで、都市の合理的な儀礼として浸透していったことが把握できた。またデパートのさまざまな結婚に関するパンフレットや披露宴を古くから行っているホテル等の社史を引き続き収集し、分析を行っている。さらに正月料理に関して婦人雑誌や料理雑誌、また食品メーカーの社史を收拾し、検討を行っている。年中行事の中で観光化した節供行事に関して、町おこしとして利用されている、大分県日田市の日田天領の雛祭りや宮崎県綾町の雛山行事の調査を進め、昨年調査を行った徳島県勝浦町のビッグ雛祭りの比較分析を行っていった。

25年度

A班については、民俗儀礼の変容をもたらす生活改善運動の資料を引き続き収集しており、それに対応した地方の資料も今年度収集することができ、現在継続して分析をしている。生活改善の対象とされた雛祭りは、節供の商品化とも連動しており並行して調査をした。また墓地法制の関連で、納骨堂に関する戦前期の資料を収集し、関東大震災や戦地など大量の異常死者に関する施設が多いことが判明した。

医療的な要因については、遺体の清拭の浸透とエンバーミングなどの普及のための衛生教育の進展が見られ、それに対する教育等にも広がっていることがわかり、専門教育の内容についてさらに調査する必要がある。

B班については社会的要因に関して、永島婚礼会が日刊紙や婦人雑誌などメディアの露出を重視し、それが結婚式の専門式場の利用を促進していったことが判明した。さらに目黒雅叙園など他の結婚式場に関する資料も収集するとともに、戦後の結婚式場の中心となった互助会関連の調査もおこなった。また葬儀場の成立については新聞記事などから通夜の位置づけによって、式場の利用が進んでいることが解明された。

経済的要因については、消費文化の浸透によって、従来節供をしない地域においても流通の変化によってひな祭りが行われるようになっていった。そこである家庭の世代別の節供行事について調査をし、国民儀礼化する節供の様相が明らかになった。さらに結婚式や葬儀の商品化に関しては、贈答用品の変化について調査をし、生活必需品との関連が判明した。

26年度

民俗儀礼に影響を与える政治的動向につ

いて、生活改善運動や新生活運動などが地域性を持って進められてきており、地域の民俗に対応しつつその重点が異なることがわかった。さらに地域によって墓地および埋葬に関する法律などの対応により、墓地や納骨堂などの管理化が進んでいったことも明らかになった。さらに医療化の動向に関しては、遺体の取り扱いが、医学的知識をもとにサービス化が進行しそれに対する教育システムも構築されていることも解ってきた。

社会的要因について儀礼空間の検討を行った。葬儀場の成立による儀礼の変化については、地域社会の変化との関連から検討した。そこでは当初儀礼上の必要から、自宅及び寺院や墓地、火葬場での儀礼の二段階であったが、儀礼の簡略化と近隣の関与の変化から自宅に収斂化され、さらに自宅で行った儀礼のすべてを行うための空間として葬儀場が成立したのであり、その要因を含めて分析を行った。また経済的要因については、婚礼用品などのパック化がデパートなどによって作られ、さらに儀礼と婚礼用品のマニュアル化によって、中間層の結婚イメージが形成されていることが解明された。

4年間を通して

通過儀礼や年中行事などの民俗が、近代化の過程において、おもに政治的、医療的、社会的、経済的影響など四つの視点から分析を試みたが、そこではそれぞれ単独ではなく常に複合的にその影響を受けることで変容が生成している点が明らかになった。それは並行している場合だけでなく、連続して生成しているなど、対象となる民俗によってさまざまである。その際、こうした変容は基本的には国民国家形成の過程で生じているわけであるが、地域性を捨象した標準とされる儀礼が形成されていくことも改めて確認できた。さらに標準とされる儀礼と常に対照化することで、地域的な民俗の差異が意識されるようになっていく。その場合、差異がより強化される場合と、逆に解消される場合があるが、それは民俗に対する人びとの評価によってその方向が別れていくことも判明した。

またこうした研究を進める上で、変容する儀礼に関する資料を従来の資料と対比させつつ収集する必要があることが明らかになった。さらに商業用パンフレットやマニュアル本、写真や動画など各種メディアも研究資料として重要であることを再認識した。以上を踏まえ、今後も積極的な資料収集が必要とされることが本研究から指摘できる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計29件)

山田慎也、地域おこしとしての雛祭り、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有り、

山田慎也、祭壇となる盆飾り - 葬祭業の関与と葬儀化する盆飾り、森羅万象のささやき、風響社、2015、481 - 500

山田慎也、儀礼の変容 - 葬送空間の変化と通夜告別式の儀礼化、変容する死の文化、東京大学出版会、2014、31 - 54
青木隆浩、庄川流域における大規模開発と観光化による地域変化、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有り、193 巻、2014、11 - 48

小池淳一、「民話 のふるさと」の構造、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有り、193 巻、2014、293 - 304

常光徹、俗信と妖怪を展示する、現代社会と民俗文化、岩田書院、2015、15 - 30

山田慎也、結婚式場の成立と永島婚礼会、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有り、183 巻、2014、209 - 230

青木隆浩、世界自然遺産・白神山地の観光化とその影響、世界遺産時代の民俗学、2013、329 - 348

小池淳一、東日本大震災と文化資源 - 宮城県気仙沼市小々汐地区から、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有り、183 巻、183 巻、169 - 185

山田慎也、近現代の葬送と墓制、日本葬制史、吉川弘文館、2012、247 - 306

山田慎也、葬儀社の創業神話 - 社史にみる非・葬儀社のルーツ、会社神話の経営人類学、東方出版、2012、92 - 109

山田慎也、枕団子と死者の想い、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有り、174 号、2012、31 - 42

山田慎也、遺影と死者の人格、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有り、169 巻、2011、137 - 166

小池淳一、地方都市における万年筆の製造・開発・販売、史潮、査読有り、新 70 号、2011、38 - 52

常光徹、流行病と予言獣、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有り、174 巻、2012、183 - 200

松尾恒一、琉球弧における船と樹霊信仰、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有り、174 巻、2012、119 - 132

〔学会発表〕(計 10 件)

小池淳一、山・巻物・職人 北奥羽のマガキ巻物とその周辺、日本民俗学会、2014・10・11、岩手県立大学

小池淳一、「三世相」の形成、日本宗教学会、2014・9・14、同志社大学

松尾恒一、めぐる時間と暮らし、儀礼文化学会(招待)、2014・7・13、儀礼文化学会本部

山田慎也、葬儀化する初盆と葬祭業の関与、日本宗教学会、2013・9・7~9・8、國學院大學

小池淳一、職人巻物の儀礼性、日本民俗学会、2012・10・7、東京学芸大学

山田慎也、遺影奉納と死者の追悼 - 岩手県宮古市のある寺院の事例から、日本宗教学会、2011・9・4、関西学院大学

〔図書〕(計 9 件)

山田慎也 他編、東京大学出版会、変容する死の文化 現代東アジアの葬送と墓制、2014、226

小池淳一 他編、岩田書院、民俗表所の現在、2015、187

小池淳一 他編、岩田書院、現代社会と民俗文化、2015、147

山田慎也 他編、岩田書院、近代化のなかの誕生と死、2013、246

青木隆浩 他編、岩田書院、地域開発と文化資源、2013、185

松尾恒一 他編、岩田書院、東アジアの宗教文化、2014、472

松尾恒一 他編、岩田書院、琉球弧、2012、317

原山浩介、日本経済評論社、消費者の戦後史、2011、324

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 慎也 (YAMADA, Shinya)
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
研究者番号： 9 0 3 1 1 1 3 3

(2) 研究分担者

常光 徹 (TSUNEMITSU, Toru)
国立歴史民俗博物館・名誉教授
研究者番号： 4 0 3 2 1 5 4 1

松尾 恒一 (MATSUO, Koichi)
国立歴史民俗博物館・研究部・教授
研究者番号：5 0 2 8 6 6 7 1

小池 淳一 (KOIKE, Junichi)
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
研究者番号：6 0 2 4 1 4 5 2

青木 隆浩 (AOKI, Takahiro)
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
研究者番号：7 0 3 5 3 3 7 3

原山 浩介 (HARAYAMA, Kosuke)
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
研究者番号：5 0 4 1 3 8 9 4